

シリーズ「子どもの野生復帰大作戦」⑧

子どもの野生復帰大作戦 推進フォーラム(上)

野外活動や自然体験の必要性を再認識し、地域ぐるみで推進していくためのフォーラムが、10月22日、豊岡市民プラザで開催されました。今回は、その中の基調講演の概要を紹介します。

つくる・遊ぶ・考える
子どもの発達と自然体験



和光大学非常勤講師 関根 秀樹 さん

子どもたちを野生に帰すのに重要なことは3つあります。「焚き火と木登りと穴掘り」。付随して水遊び、泥遊び。子どもに自然体験をさせるためには、歩いて通える範囲内で、これらができる場所があちこちにあれがいいと思います。

自然体験講座では、よく植物の名前を覚えるとかになりがちですが、名前だけ覚えても仕方ありません。地元の民

《問合せ》生涯学習課

俗に結びついたような、自然と人間との交渉の歴史がどここの土地にもあります。そんなことを発掘しながら考えると、おもしろいと思います。

昔の遊びを昔のままやろうとしてもうまくいきません。例えば、竹トンボ。伝統型は、実は子どもには大きすぎて重すぎます。そこで3グラムほどの小さいものを作ります。これだと小さな子どものもので十分飛びます。伝統的な遊びに現代の知恵を少し加味して遊びをデザインしてやる。遊びそのものが進化します。

野外体験でよく火おこしをします。余談ですが、学生時代に火おこしの初代世界チャンピオンになってしまいました。

た。中学生のころまでは、炭焼きのおじさんは、山ではこれがいいと言って火打ち石を使っていました。体験学習の時など、技術が身に付いてない人が教えると火がつかず「昔の人は大変だったね」となってしまいます。しかし、火打ち石は下手なマッチよりも早く火がつかます。決して不便な道具ではありません。

もう一つ、現代人が陥りやすい錯覚は、大昔の人は現代人よりも劣っているという考え方です。大昔の人たちも脳の構造や機能は全く同じです。あとはどういう経験や生活をしてきたかの差で、知識の質が違っただけです。例えば、アフリカの少数民族など、自然の中で暮らしている人たちは、環境の中で生き抜く知恵を体に溶け込ませています。われわれ現代人は、そのような本来持つべきだった手の知恵、体の知恵を外部に肩代わりさせて、どんどん便利にしてきた代わりに、本来の意味の知恵をなくしてしまいました。それが今、若い世代に大きなゆがみになって現れています。(次回に続く)

子どもの野生復帰大作戦のキャッチフレーズ・シンボルマークが決定しました!

今年度から実施している「子どもの野生復帰大作戦」のキャッチフレーズとシンボルマークを募集したところ、全国各地から、キャッチフレーズ775点、シンボルマーク113点もの応募があり、厳正な審査の結果、次のとおり賞を決定しました。最優秀賞に選ばれたそれぞれの作品は、今後、バッジやステッカーなどのグッズに利用し、大作戦のPRに活用します。

《キャッチフレーズ》

最優秀賞

「がんばれ だろんこ ちるどれん」

鳥尾里美さん(豊岡市日高町)

＜審査評＞ひらがなを使い、小さな子どもでも理解できる、非常に分かりやすい作品である。「だろんこ」の言葉に「子どもの野生復帰大作戦」を端的に象徴する意味合いが含まれている。

特別賞

「飛び出そう 自然はみんなの友達だ！」

小田中準一さん(千葉縣市川市)

「大地がボクらの教室だ！」

濱津芙蓉さん(熊本県熊本市)

《シンボルマーク》

最優秀賞

若林陽介さん(神奈川県座間市)

＜審査評＞自然の中で活動する際の子どもの気持ちや勢いを見事に表現している。また、山野や悠々と流れる川の様子など、豊岡市の自然の総体を表した作品である。

特別賞



杜多利香さん(神戸市西区)



松長雅風さん(愛媛県松山市)